



水大学園だより

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産大学校 〒759-6595 下関市永田本町2丁目7-1 電話083(286)5111
ホームページ <https://www.fish-u.ac.jp> [発行] 学生課

校長あいさつ

校長 下川 伸也



水産大学校 校長職の重責を担い4年目を迎えております。保護者の方々をはじめ、関係の皆様方には平素より、水産大学校の教育・研究活動に対し、ご指導・ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。今後も引き続き活動を充実するべく努めて参る所存です。どうぞ

よろしくお願い申し上げます。

さて、大学校の実績につきまして、令和6年度の卒業・修了生の就職率は98.7%、そのうち水産業及び関連産業への就職率は86.3%となりました。就職先となる企業の皆様からの多大なご支援とともに、合同企業説明会の開催、学科長・担任教員等による学生就職支援のための企業訪問などの地道な広報活動が功を奏しつつあるものと期待をしております。また、入学試験につきましては、本科で3.3倍の倍率を維持でき、新学期を迎え本科234名、専攻科50名、水産学研究科7名と合計で291名の新入生を受け入れることができました。これも、教職員による高校訪問やオープンキャンパス等のイベントを実施するなど、徐々に成果が現れはじめたのではないかと考えております。さらに、海技士養成に関しましても、定量的指標として二級海技士筆記試験受験者の合格率が92.9%となり、目標値と設定された合格率80%も大幅に上回る成果を上げ、水産庁の船舶部門に対し、その中核となる人材を輩出することができているとの評価を受けています。こうした活動に対するご支援に対しましても改めて深く感謝申し上げます。

大学校構内では、講義・実験・実習や卒論指導、乗船実習も含めた日々の教育活動とともに、クラブ活動、学生自治会の活動、大学祭、地域のボランティア活動、地域住民の方々や近隣の漁業者や水産業界の皆様に向けた公開講座など、多岐に渡り活動されていた事項に対して、6年前の所謂コロナ影響を受ける前の状況へ徐々に復活できるよう働きかけてきています。特に、学生自治会の運営やクラブ活動、滄溟寮一年生による耕洋丸の遠洋航海出航式時の航海安全を祈願する演舞“スタンバイ”、近隣の

漁業者や地域住民の方々に向けた公開講座（昨年度のテーマは、水産大学校の最近の研究成果から、5年ぶり対面方式により開催）など、従前は当たり前に行われていた行事を再開し、“活気ある水大”に戻れるように学生諸君を応援していく所存です。

さらに、昨年度から今年度にかけてのトピックスとして①2025年5月24日、25日に日本水産工学会学術講演会を水産大学校キャンパス内で開催しました。全国から120名以上の方々にご参加いただき、一般講演として62件の講演が行われました。同学会講演会の水産大学校での開催は、平成29年以来8年ぶりとなります。②機構初のベンチャー企業の運営として、本校松本浩文教授が「Digital Fisheries Lab. 合同会社」の社長となり、初めて水産研究・教育機構の成果活用事業者として認定され、法人登記が完了しました。これにより、漁業生産の現場においてアプリシステムの運用とデータ管理を中心にICTを積極的に活用した事業展開を目指すとされています。③山口県との連携事業の実施として、「山口県ならではの」新たな養殖技術の開発・普及および県独自のブランド魚「ほろ酔い魚」の加工・保存技術の開発を実施しました。④令和6年能登半島地震への支援として、同年5月に本校練習船天鷹丸を現地に派遣し、海底調査等を実施しました。⑤釜慶大学校（韓国）との学術交流会を5年ぶりに対面での実施として復活し、釜慶大学校での開催となりました。当方からは、食品科学科の宮崎泰幸学科長を団長として、教員5名および学生5名が訪韓し参加しました。

以上、昨今のトピックスを述べてきましたが、水産大学校は、国立研究開発法人水産研究・教育機構の人材育成業務を担う部門として、機構業務の一翼を担うとともに、これまで通り、本科・専攻科及び水産学研究科の教育・研究活動が基盤であることにも変わりはありません。引き続き、“水大生諸君”がこの吉見の地で学び、水産学の基礎を身につけ、巣立っていく。文字通りの母校として誇れるような学園づくりに邁進する所存です。今後とも尚一層のご指導とご協力をお願い申し上げます、挨拶に代えさせていただきます。

最近の話題

着任のご挨拶

水産流通経営学科 助教 津久浦 健太



初めまして、2024年11月1日付で水産流通経営学科に着任した津久浦健太です。専門は数学です。特に数学基礎論、数理論理学という分野を研究しています。数学、情報学、論理学、哲学などを数学を用いて研究するメタ的な視点が重要となる研究です。水産大学校では情報学の教員として、MNCの運営やコンピュータ基礎、情報科学などの授業に携わっています。

私の研究は水産業と全く関係がありませんが、近年の情報技術の発展はめまぐるしく、いくつかはスマート水産業のような形で水産業に関係していると思います。AIなんかすごいんですね。どう思いますか？ AI。私はよく使っていますが、先生方は学生に使ってほしくないなんて意見もあるのではないのでしょうか。しかし学生達に提供しているMicrosoft365は、Copilotという対話型のAIサービスを含んでいます。学校側で既に提供しているんですね、AI。今後AI技術は増える一方だと思いますし、そんな社会を生きていく学生達。使って慣れた方が良いです。

やはりコンピュータが扱えると出来ることが格段に増えますからね！嘘です。目標次第ですが、実はそんなに大差がありません。Word使わずとも手書きでいいじゃないですか。Excel使わずとも筆算でいいじゃないですか。何が問題というのか。最終的に同じものが出来るならどっちだって構いません。なら楽な方でやろう。オススメですコンピュータ。

メモを取るときや2、3ケタの足し算をちょっとするとき、Word、Excelを一々起動する人はあまりいないと思います。手でやった方が速いなら手でやれば良い。コンピュータを利用するという事は単に、目標達成のための選択肢を1つ多く持つというだけの事です。「何ですか」より「何をするか」が大切ですので、学生にとってのAIが特別な魔法ではなく、AIを使った方が速いなら使う程度の選択肢の1つになれば良いなと思います。

今はちょうど高校で情報Iが必修になり、情報教育への注意が特に必要な時期です。しかし基本は変わらないはず。コンピュータを利用する能力のことをコンピュータリテラシーと称することがあります。コンピュータリテラシーを備えていればきっと、AIのような未知の情報技術が今後登場しても、適切な距離感で使用することが出来ると思います。そんな能力を少しでも学生に伝えられるよう努力していきます。これが私に出来る水産業への寄与です。どうぞよろしくお願ひします。

着任のご挨拶

海洋生産管理学科 助教 三澤 遼

令和7年4月1日付で海洋生産管理学科の助教に着任しました三澤 遼と申します。出身は長野県松本市で、内陸で育ったこともあり、幼い頃から海への憧れを強く抱いておりました。子供のころに父に連れられて新潟の海で釣りをした経験が、海や魚に興味をもつきっかけとなりました。

私は学部・修士課程では高知大学にて魚類分類学、とくに軟骨魚類の一群であるガンギエイ目の研究に取り組み、その後、京都大学に進学し、本目魚類の集団構造に関する研究で博士の学位を取得しました。当時は学位取得後の進路について明確な展望はありませんでしたが、軟骨魚類を研究



していたご縁もあり、水研機構の東北区水産研究所(現：水産資源研究所)底魚資源部八戸庁舎に研究等支援職員として採用され、アブラツノザメの資源生態学的研究に携わる機会を得ました。その後、任期付き研究員として引き続き同庁舎に勤務し、「主要底魚類の系群構造および生活史特性の解明と資源評価の高度化」をテーマに研究を続けるとともに、資源評価業務にも従事しておりました。テニユア審査にも無事に合格し、本校に着任するまで八戸にて研究活動を行っておりました。

八戸庁舎は資源調査・評価事業の一環として、東北太平洋沖で着底トロール調査を精力的に行っていました。この調査では評価対象魚種以外にも多種多様な魚類が採集され、図鑑にも載っていないような珍しい深海魚に出会うこともありました。分類学を専門としていた私にとっては、論文執筆の機会にも恵まれ、大変充実した環境でした。今回、久しぶりに西日本で暮らすこととなり、こちらの魚に触れるのも久しぶりで、新鮮な気持ちです。下関は日本海と瀬戸内海に面し、東シナ海にも近いなど、魚類を研究するうえでは非常に恵まれた立地であり、今後どのような研究を展開していこうか楽しみに考えています。

私のこれまでの研究人生は多くの素晴らしい指導者との出会いに恵まれ、そうした経験が教員を目指すきっかけにもなりました。今後は、自身の経験を学生の皆さんにも少しでも還元し、次代を担う研究者の育成に貢献したいと考えております。今回の着任は、水研機構内での異動という形ではありますが、水産資源研究所と水産大学校は業務内容や雰囲気が大きく異なります。これまで教育に携わる機会がほとんどなかったため、講義や実習についてはま

だ手探りの状態ですが、少しでも早く本校の業務に慣れるとともに、研究だけでなく教育にも力を入れていきたいと思っております。まだ研究者としても教育者としても経験の浅い身ではありますが、今後とも皆様のご指導・ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

「2024 International Ocean Energy Symposium & 21th Joint Young Research Forum に参加」

海洋機械工学科 講師 吉村 英行

令和6年12月16日～17日に福岡市で開催された2024 International Ocean Energy Symposium & 21th Joint Young Research Forumに参加してきました。このシンポジウムは日本と韓国の大学が海洋エネルギーに関する学術交流と若手研究者の教育目的で開催されています。開催地は日本と韓国が交互で主催し、今年で21回目の開催となりました。今回参加した大学は、日本からは佐賀大学海洋エネルギー研究所と水産大学校海洋機械工学科の蒸気研究室、韓国からは韓国海洋大学校、木浦海洋大学校が参加しました。



今年は佐賀大学海洋エネルギー研究所の主催による開催となり、我々の蒸気研究室からは、4年生が5名、教員が3名参加しました。他大学は大学院生が英語で発表する中、我々のグループは大学4年生が英語で発表するため、事前の準備作業は非常に大変ではありますが、彼らにとっては貴重な経験になったのではないかと思います。また今回のシンポジウムでは、令和6年3月に当校を卒業し、佐賀大学大学院へ進学した教え子3名が佐賀大学側で参加しており、彼らの成長を感じることができたシンポジウムでもありました。

シンポジウム終了後は親睦会が開催され、韓国の教員や学生と意見交換を行うなど親睦を深めました。2次会は教員と学生が分かれて行動したため、夜の博多の誘惑で粗相する学生がいないか心配ではありましたが、何事もなくシンポジウムと親睦会を終えることができたことは大変良かったのではないかと思います。(筆者が学生時代にも水大生として同シンポジウムに参加しましたが、その際は毎年どんちゃん騒ぎで、異国の地の路上で酔いつぶれて寝ている学生や、福岡の能古島で開催されたときには夜の海辺で教員を海に投げ捨てるなど、無茶苦茶なことをしていましたが、今の学生は大人しくて感心します。)

次回は木浦海洋大学校が主催として22回目のシ

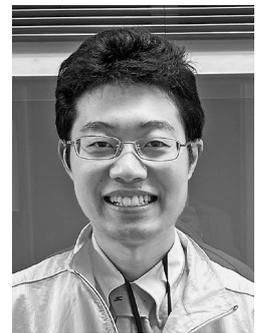
ンポジウムが韓国の済州島で令和7年8月に開催されることになりました。我々蒸気研究室にも4月から研究室配属された5名の4年生と研究科1年生とともに、このシンポジウムに参加する予定です。8月の行楽シーズンの済州島開催なので、旅費だけが懸念事項ではありますが、研究室の学生に貴重な経験をしてもらうためにも、引き続き教員として支援を続けていきたいと考えています。

また、毎年行われる本シンポジウム参加に際して、一般財団法人水産大学校後援会からの多大なる御支援をいただいております。紙面を借りて心から感謝申し上げます。

着任のご挨拶

食品科学科 助教 柴田 真樹

令和7年4月1日付で食品科学科の助教に着任いたしました。柴田真樹と申します。昨年度までは弘前大学にて(博士課程は岩手大学 連合農学研究科の弘前大学所属)イシモズク(イシモヅク)の健康効果についての研究を行ってまいりました。イシモズクは褐藻類に分類される茶色い海藻であり、青森県の日本海側や陸奥湾にて採取されているモズク(イシモヅク)の一種です。そんなイシモズクの健康効果、いわゆる機能性成分の評価を行ってまいりました。イシモズクに限らず海藻には様々な機能性成分が含まれており、その機能性効果についても様々な報告がございます。褐藻類だけでも、赤色の天然色素で抗肥満作用や抗糖尿病作用が報告されているフコキサンチン、ワインやお茶などに含まれるポリフェノールの一種で、抗酸化作用やアレルギー抑制作用が報告されているフロロタンニンそして腸内環境を整える作用が報告されている食物繊維などがあります。海藻に含まれる機能性成分には他にも様々ありますが、まだまだ未知な部分も多いです。海藻の機能性を明らかにし、全ての海藻が食として何かの形で利用できるような世界にする。そこに至るための研究を行っていく所存です。



さて教職に着任してはや二ヶ月、卒業論文研究の指導や学生実験の監督指導を通じて、学生さんの疑問に答えられない、学生さんの求める回答ができていないところが多く、「教える」ことに対していかに自分の考えが甘いかを痛感している毎日です。他の先生方のお教えなさる現場を教師という立場から改めてみて、事実を教えるだけでなく限られた時間の中で答えへ導くことが重要であることに気づきました。そして今更ながら今まで自分が教えを受けてきた先生方がいかに苦勞なされていたかが分かった気がします。

学生さんはいろいろな考え方、意見を持っており、教えることはとても難しいですが、教職に就けたことはこれ以上なく誉なことと感じています。だ

からこそ私はこれまで培ってきた経験や知識を可能な限り伝え、この学び舎にて何かを得ようと頑張る学生さんにアドバイスを送り、そして迷うところをサポートしていただけるような教員となり、職務を全うできればと考えています。

最後に研究者として社会に貢献できる研究を行うと同時にこれからの社会を担う学生さん方の背中を押せるように日々精進して参ります。至らぬ点多いかと存じますが、どうぞよろしくお願いいたします。

着任のご挨拶

生物生産学科 助教 柿岡 諒



今年度より生物生産学科資源増殖学講座に着任いたしました柿岡諒と申します。魚類の形をはじめとした性質が、種類によってさまざまに異なるのはなぜかということについて、性質の違いを決める遺伝的なしくみや、性質が分かれてきた系統の歴史について遺伝情報などを用いて研究してきました。

私は広島市の海沿いで育ちました。家族や友人と釣りに行ったり、いろいろな魚の生態について本で読んだりしたことをきっかけに魚の生態学の研究をしようと思い立ち、京都大学理学部に進学しました。そこで様々な魚の分布する地域がどのように決まるのか興味を持ち、淡水魚のスゴモロコの分布域がどのように成立し、そのなかで住む環境に応じて形がどのように違って来たのかについて研究を始めました。

それから、琵琶湖固有種のホンモロコは、川に住む近縁種と形や生態がどのように違っていて、その違いはどのような系統的な歴史を経て、どのような遺伝的なしくみで決まっているのかを京都大学大学院理学研究科で研究し、博士の学位を取得しました。

それから京都大学生態学研究センターでホンモロコの研究を引き続き行い、総合地球環境学研究所で東南アジアの底引き網漁などで漁獲される海水魚メガネタマガシラなどの種内での遺伝的系統について研究をおこないました。その後国立遺伝学研究所で、サケのように川で産卵し海に下る集団や一生を川や湖で過ごす集団が複数あるイトヨの集団が分かれた歴史や、水流を検知する感覚器の形が種によって違うハゼのなかまは、その違いがどのような遺伝的なしくみで決まっているのかなどを研究しました。琉球大学に移り、インドネシアのメダカの研究を始めました。インドネシアのある湖ではメダカが同じ祖先から3種類に分かれたのですが、生態や形がどのように違って来たことで別の種類に分かれることができたのか、その遺伝的なしくみはどのようなものなのかを研究しました。そして、このたび水産大学校に着任いたしました。

いろいろな水産動物をこれからも持続的に利用するには、生息地の改変や環境変化、漁獲など、人間

活動などの影響を受けて変化しつつある環境でも水産動物が繁殖し、生育し続けられるようにする必要があります。これまでの経験を活かし、水産動物が環境に適応するしくみを調べ、変化する環境に対応できる増養殖を実現できるよう研究をおこない、教育に取り組もうと思います。よろしくお願いいたします。

着任のご挨拶

耕洋丸専任教員 鶴見友幸

本年度4月より耕洋丸専任教員に着任しました鶴見友幸と申します。私は愛知県知立市出身で、平成23年3月に本校専攻科船用機関課程を修了後、川崎近海汽船株式会社へ入社し、フェリーやRORO船での機関士としての乗船や工務監督の経験を積みました。縁あって当機構へ転職させていただき、漁業調査船「陽光丸」や水産庁漁業取締船「白嶺丸」での乗船を経て、本校耕洋丸へ着任しました。

耕洋丸への配属が決まった際には、学生時代に練習船にて指導して頂いた富賀見船長や平野機関長、荒木一等機関士と再び乗船できる喜びもあり、成長した姿を見せたいと意気込んでおりましたが、実際に乗船が始まると今まで経験の無かった学生への教育の難しさ、責任の重さに戸惑いを感じながら日々を過ごしております。自身の学生時代以来実に14年ぶりとなる耕洋丸への乗船は懐かしさもあり、遠洋航海を過ごした学生居室などを巡検する際には当時の友人たちとの馬鹿話やたわいもない喧嘩を思い出すこともしばしばあり、学生達にも船上の厳しい環境の中ではありますが、私と同じように友人達と助け合いながら貴重な集団生活の思い出も作っていただければと思います。私自身まだまだ未熟ですが、様々な業務体系の船へ乗船していた自身の経験を活かし、よく起こる機関トラブルやそのトラブルに対してどのような手段で解決したかを学生が社会に出てから少しでも困らぬよう、配管図や各機器の取扱説明書を用いて分かりやすく教育することを心がけています。また、耕洋丸では海技士を養成する学科以外の乗船も行います。そういった学科の学生が乗船された際にもエアコンや冷凍庫、モーターの原理など身近な物の構造について説明し、それぞれの学生の将来に少しでも役立つような教育を行うようにしています。

水産大学校では、乗船実習を通して社会で即戦力となる人材を毎年輩出し、様々な分野でご活躍されている方々が大勢おられます。これからも多くの優秀な人材を輩出できるように、私も微力ながら貢献していきたいです。練習船の乗組員として諸先輩方が築き上げられてきた教育の質を落とすことのないように私自身、日々精進して参りますので、ご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願いいたします。



在校生の声

新天地での学びと繋がり

水産流通経営学科1年 安部 光輝

入学からもうすぐ3か月が経過します。東京から来るという事も相俟って、最初は新天地に対する若干の恐怖、新生活や友人関係に対する不安、大学生生活や好きな分野を学ぶことへの期待、様々な感情を胸に抱いて下関市吉見へ向かいました。東京と比べてザ・自然、当然の様に遊ぶ場所もお店も殆ど無い、夜は人の声より自然の声。しかし住めば都、多少感じる不便さも慣れれば問題ありません。

そんな新生活に慣れた頃、遂に大学が始まりました。最初の不安は一瞬にして消え、すぐに友人が来て先輩方とも繋がる事が出来ました。講義についても最初は当然基礎も多いですが、面白い講義が多く毎日がとても楽しいです。

そんな水大生活ですが、何もせず適当に過ごしているだけでは勿体ない、そう思い始めた中で先輩と共にボランティアに行く事へ。早速参加すると確かに大変、けれど有意義な時間を過ごせました。そこで得られた学びや繋がりはとても貴重で、将来の糧となる事は間違いありません。時間の経過は一瞬、ですがまだ四年あります。その間に将来を考えながらこの恵まれた環境で勉学に励み、ボランティア等の学外活動で繋がりを作りつつ、出来た友人と日々を過ごしていこうと思います。

「乗船実習を振り返って」

海洋生産管理学科2年 上野 菜々泉

前期授業が始まって間もない4月に、私たち海洋生産管理学科2年生の乗船実習が行われました。私は船に乗った経験があまりなかったため不安も感じていましたが、貴重な機会を活かそうと積極的な姿勢でこの実習に臨みました。

船内で行われた授業では、船の仕組みや航海士の仕事について深く学ぶことができました。授業中や休憩時間に質問に答えてくださった乗組員の方々は、耕洋丸のことはもちろん、気象海象、海の生き物についても豊富な知識をもっていました。私たちが普段受けている授業の内容は、将来に生かせるものなのだと改めて実感しました。

何よりも、現場で働く方々の姿を間近に見られたことが、今回の実習で最も貴重な経験だったと思います。特に出港時の船橋の様子が強く印象に残りました。巨大な船を安全に動かすため全員が緊張感をもって動いており、各場所に指示を出す乗組員の方々はとても頼もしく感じました。

私はこの実習を通じて、航海士として船に携わりたいという目標ができました。目標が決まったことで、学校での授業への関心もさらに高まっています。実践的に学ぶ機会を与えてくださった乗組員の

方々、教員の方々に改めて感謝したいです。

【再出発】

海洋機械工学科2年 藤村 永愛

「過去の過ちを清算し、自尊心を取り戻すにはどうしたら良いのか」長年、自分に問いてきました。そんな私が今は、女子端艇部の部長を務めています。

端艇部では慣例的に水産高校出身の者が就任する流れがあり、普通科高校出身の私が務めるには非常にプレッシャーのある肩書きです。ですが、普通科卒業だからと馬鹿にされたくない、自分が前例を作り最高の仲間たちと結果を残す。そのような強い気持ちで挑みました。コロナ禍を経ての活動再開で苦しい状況でしたが、全員の努力が実り、二年連続で全国大会において三位に入賞することができました。

さらに一昨年は、趣味の創作活動の延長として出版社に応募した際、編集者から刊行のお誘いをいただきました。最終的には辞退しましたが、自分の才能を発掘する貴重な機会となりました。

こうして振り返ってみると、即物的な人生でした。得たものもあれば後悔も多い学生生活ですが、過去は記憶し、未来は予期するものです。ようやく色々なことが上手くいくようになってきました。ここでは前向きなことに取り組んでいます。もう恥辱を纏ってはいません。私の描いた未来はやがて現実のものになっていくでしょう。この眼を通して、そして私が敬愛する全ての人たちの支えによって。

海とともに過ごす大学

食品科学科1年 衛藤 蒼真

私は水産大学に今年入学した一年生です。入学前私は船や漁業について主に学ぶ学校だと思っており、正直なところ長く続くか心配でした。ですが入学してみると、船や漁業のことだけでなく海の動植物についての講義も多く、魚類や他の海の生物が好きな私にとってとても刺激的な毎日を過ごすこととなりました。また、私は寮に入寮したのですが、平日は朝昼晩の食事が提供されるので健康的な生活も送れています。さらに水産大の寮は自由度がとても高く縛られたりせずに勉強や趣味に没頭できます。近くの海に入って、フィールドワークをしたり釣りをすることも可能です。私は食品科学科に所属しており、将来は生物の知識を食に生かせるバイオ技術者というものを目指しています。私は海の生き物でも特に蟹に興味があり、在学時は勿論、卒業後も蟹についての研究をしていき、蟹の甲羅の成分を食品に役立てる仕事に就けるようになりたいと思っています。水産大はその点、海の生き物が好きな人にとって、とてもサポートが手厚く優遇された環境であると思います。水産大学校に入学してから卒業す

るまで海で遊んだり研究したりして、海とともに充実した大学生活を送っていきたくです。

「好き」が自信に変わった1年

生物生産学科2年 福田 歩 実

水産大学校に入学してから1年が経ちました。この1年を振り返ってみると、私の人生の中でも濃密で充実した1年であったと感じます。私は、水産に関する知識や経験があるわけではなく、「ただ好きだから」という理由で入学を決めました。しかし、この1年の学びを通じて、そのような不安は次第に解消され、自信に変わりました。

私が所属する生物生産学科では、1年次から座学に加えて様々な実験や実習が行われます。そこで私は、専門的な知識をただ耳にするだけでなく、実際に体験することができました。また、教員との距離も近くて頻繁に対話する機会があり、これまで興味を持っていなかった分野について、友人や教員から学ぶことで水産への関心がさらに深まりました。それに伴って知識や経験も積み重なり、私の自信へと繋がったのだと思います。

本校での生活では多くの出会いがあり、同じ学科内はもちろん、他学科との交流も盛んです。将来同じように水産業界を支えていく仲間との出会いは、私に多くの気づきと新たな視点をもたらしてくれました。

来年は3年生となり、自身の将来について真剣に考える機会も増えます。これまでの学びや経験を将来に活かせるよう、今後も努力を惜しまず、学生生

活を前向きに楽しんでいきたいと思っています。

研究科に進学して

水産学研究科2年 水産資源管理利用学専攻
熊谷 英 紀

私は生物生産学科を卒業後、水産資源管理学専攻分野に進学し、トラフグ属魚類における自然交雑現象に関する研究を行っています。私がこの研究テーマに関心を持ったのは、高校生の時に見たフグの雑種増加に関するニュースがきっかけです。当時は食の安全を脅かす問題として漠然とした危機感を抱くのみでしたが、現在では、フグの進化の過程をリアルタイムで観察するという貴重な研究に携わることができて嬉しく思っています。

研究科では、本科の時に行っていた研究を深めることを目標に研究活動を行ってきました。所属する研究室では、日々のルーチンワークやサンプルの測定、データの整理、DNAの抽出やPCR、データ解析といった実験に励み、同じ研究室の学生と切磋琢磨しながら課題解決に取り組む日々は、自身の成長にとって大きな糧となっています。研究科での日々は、時に厳しい課題と向き合うこともありますが、ここで得られる専門的な知識や技術、そして何より一つのテーマを深く探求した経験は、将来の皆さんにとってかけがえのない財産となるはずですが、少しでも研究科に興味があれば、まずは気軽に先輩たちに相談してみてください。きっと新たな発見があると思います。

クラブ紹介

水の生き物研究会（アクラス） 活動報告

生物生産学科3年 湊川 莉 菜

私たち水の生き物研究会（通称アクラス）は2001年から続く歴史あるサークルです。現在は部内で淡水、海水、骨格標本、種苗生産、広報の5つの部門に分けて活動を行っています。淡水、海水部門では採集や遠征の計画、部室での生体飼育を行っており、淡水ではオヤニラミ、ギギ、カメなど、海水ではマトウダイ、ハタ、フグなどを飼育しています。骨格標本部門では展示会参加を目標に以前部室で飼育していた魚などを用いて標本制作をしています。種苗生産部門では論文を用いた勉強会や餌料生物の培養を行い、小規模で魚を稚魚まで育成することに挑戦中です。広報部門ではSNSを用いて日々の活動を発信しており、YouTubeチャンネルも開設しています。

部全体の活動として学内外でのイベント参加と、図鑑制作があります。イベントについては、地元の小学校の課外活動にて小学生に生き物と触れ合う楽しさを伝える活動や、お祭りでのお手伝いや出店、下関市内の施設での生き物展示や出張授業など生き

物の魅力を子供達に伝えるイベントに多数参加しています。

図鑑については、部員が各自興味を持って調査、研究したことをまとめる研究雑誌を制作し、現在は水大周辺に流れる西田川の生物をまとめる図鑑を制作中です。

海燕祭では生き物展示のほかに毎年どじょうの天ぷらなどの食べ物も出店しています。今年もたくさんの方にお越しいただき生き物の魅力、アクラスの活動の面白さをぜひ知っていただけたら幸いです。



学生部だより

令和6年度における就職対策と進路状況について

学生部長(就職対策検討委員長) 大原 順一

本校では就職対策検討委員会を設置して、学生課就職支援室の就職統括役を中心に学生への就職支援を行っています。

就職対策に関する主な活動は、(1) 3年生を主に対象とした自己分析・自己発見のための職務適性テストの実施、(2) 就職活動の専門講師やその他様々な分野で活躍されている講師を招いた就職ガイダンスの開催、(3) 就職手引き書「就活支援ブックー就職活動編ー」を3年生全員に配布し、これを用いた就職指導、(4) 企業等の採用情報の把握、(5) 企業研究会・説明会の開催、(6) 就職活動を行う際のキャリアカウンセリング、(7) 本校の就職支援ツールであるキャリアス UC の活用等です。

令和6年度は、合同企業説明会を Web で開催し、148社に参加頂きました。また、水産及び関連分野の業界や企業の理解を深めることを目的として、キ

ャリア教育の一環として実施している企業研究会・説明会を対面で44件実施するとともに、学生がキャリアス UC にアクセスして、就職支援情報の提供、水産系企業の求人票や企業情報の閲覧、インターンシップの検索等に活用しました。さらに、採用時に WEB 面接が導入されている背景から、WEB 面接専用のブースを学内に設けるなど環境面でも配慮を継続しました。これらの活動の結果、令和6年度卒業・修了者の就職希望者155名(本科97名、専攻科48名、研究科10名)の就職率は98.7%(前年度は99.4%)で、このうち水産関連分野への就職率が86.3%(前年度は83.4%)と高い割合で維持しています。

インターンシップは一昨年から大きく制度が変わり、就業体験が重要視されるだけでなく、インターンシップに参加した学生情報を企業側が採用選考活動に使用できるようになります。本校では引き続き、多様な採用に関する情報を収集し、学生の就職活動が円滑に行えるように必要な支援を実施してまいります。

令和6年度 卒業・修了者の進路状況

令和7年3月31日現在

本 科 専攻科 研究科	修 卒 了 業 者 及 び 数	進 学						就 職 試 験 準 備 ・ そ の 他 ②	就 職 希 望 者 数	就 職										進 路 未 定 者 数	就職率 (%)				
		大 学 院	研 究 科	専 攻 科	専 攻 科 等 学	研 究 生 等	進 学 者 合 計			水 産 関 連 分 野											内 定 者 合 計 ①	水 産 関 連 分 野 者 就 へ 職 し 希 望 ③/②	水 産 関 連 分 野 者 就 へ 職 し 内 定 ③/①	全 体 就 職 率 ①/②	
										国 家 公 務 員	地 方 公 務 員	各 種 団 体	漁 業 ・ 養 殖 業	水 産 加 工	水 産 流 通	調 査 開 発 等	資 材 給 付 等	小 計 ③	そ の 他 分 野						就 職 率 ③/②
水産流通学 科	男	11	0	0	0	0	0	11	0	0	1	0	1	7	0	1	10	1	11	0	90.9	90.9	100.0		
	女	2	0	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	1	2	0	2	0	100.0	100.0	100.0		
海洋生物学 科	男	34	4	2	22	0	0	6	0	1	3	0	1	0	0	1	6	0	6	0	100.0	100.0	100.0		
	女	4	0	0	3	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	0	100.0	100.0	100.0		
海洋機械科	男	44	2	5	25	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	6	7	5	12	1	53.8	53.8	92.3		
	女	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0	0.0	0.0		
食品科学科*	男	24	4	1	0	0	0	1	18	0	1	0	10	4	0	2	17	1	18	0	94.4	94.4	100.0		
	女	15	1	0	0	0	0	1	13	0	2	0	5	2	0	2	13	0	13	0	100.0	100.0	100.0		
生物生産学科	男	34	5	0	0	0	5	0	29	1	5	2	1	6	8	2	2	2	29	0	93.1	93.1	100.0		
	女	4	0	0	0	0	0	0	4	0	3	0	1	0	0	0	0	4	0	0	100.0	100.0	100.0		
計	男	147	15	8	45	1	0	69	1	77	7	7	18	19	2	12	67	9	76	1	87.0	88.2	98.7		
	女	25	1	0	3	0	0	4	1	20	0	5	3	6	3	0	3	20	0	20	0	100.0	100.0	100.0	
専攻科 船舶運航課程	男	18	0	0	0	0	0	0	18	2	0	0	1	0	5	1	3	12	6	18	0	66.7	66.7	100.0	
	女	4	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	1	0	4	0	4	0	100.0	100.0	100.0		
専攻科 船舶機関課程	男	22	0	0	0	0	0	0	22	2	0	2	1	0	6	2	3	16	6	22	0	72.7	72.7	100.0	
	女	25	0	0	0	0	0	0	25	3	0	0	0	12	2	3	20	5	25	0	80.0	80.0	100.0		
計	男	43	0	0	0	0	0	0	43	5	0	0	1	0	17	3	6	32	11	43	0	74.4	74.4	100.0	
	女	5	0	0	0	0	0	0	5	0	0	3	0	1	1	0	5	0	5	0	100.0	100.0	100.0		
研 究 科	男	10	0	0	0	0	0	0	10	0	0	1	0	1	0	2	4	8	1	9	1	80.0	88.9	90.0	
	女	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0	0.0	0.0	
総 合 計	男	200	15	8	45	1	0	69	1	130	6	7	8	2	19	36	7	22	107	21	128	2	82.3	83.6	98.5
	女	30	1	0	3	0	0	4	1	25	0	5	6	0	6	4	1	3	25	0	25	0	100.0	100.0	100.0
	計	230	16	8	48	1	0	73	2	155	6	12	14	2	25	40	8	25	132	21	153	2	85.2	86.3	98.7

* 9月卒業1名含む

【就職先の分類】

水産関連分野

各 種 団 体 : 水産に関する団体 (漁業、流通、船舶等関係団体)

漁 業 ・ 養 殖 業 : 水産動植物の採捕又は養殖の事業者

水 産 加 工 : 水産動植物を原料又は材料として、食料、肥料その他の有用物を生産する事業者

そ の 他 : 水産業関連分野以外の公務員・団体・企業など

水 産 流 通 : 水産物の貯蔵、運搬、販売等の流通に関する事業者

調 査 開 発 等 : 海洋水産関連の調査会社

資 材 材 給 付 等 : 水産業やそのサービス部門等に資材供給等を行う関連事業者

令和6年度卒業生進学・就職状況一覧表

令和7年3月31日現在

◎進学(大学院等)	各種団体		
岡山大学 医学部 保健学研究科	香川県漁業協同組合連合会	㈱グローバルオーシャンディベロップメント	日本海洋事業㈱
海上保安大学校(初任科)	(国研) 海洋研究開発機構(船舶職員)	ケイラインローローバルシップマネージメント㈱	㈱日本海洋生物研究所
九州大学大学院	(国研) 水産研究・教育機構(一般職)	元気寿司㈱	日本電技㈱
群馬大学 医学研究科	(国研) 水産研究・教育機構(船舶職員)	サンエイ・マリン㈱	日本無線㈱
埼玉大学大学院	(国研) 水産研究・教育機構(研究職)	三進金属工業㈱	日本郵船㈱
佐賀大学大学院理工学研究科	全国共済水産業協同組合連合会	㈱サンヨー堂	ネクサス㈱
自治医科大学 医学研究科	日本海洋レジャー安全・振興協会	J R C S ㈱	㈱ノースイ
東京海洋大学大学院	日本小型船舶検査機構	㈱JA フーズさが	八馬汽船㈱
長崎大学大学院	(一財) 日本食品検査	㈱重岡	㈱はま寿司
新潟大学大学院	北海道信漁連	㈱ジャパンシーフーズ	林兼産業㈱
福井県立大学	山口県漁業協同組合連合会	ジャンボフェリー㈱	阪九フェリー㈱
北海道大学環境科学院		㈱商船三井	広島魚市場㈱
北海道大学大学院	民間企業	㈱商船三井さんふらわあ	フィードワン㈱
宮崎大学大学院	アイオン㈱	神港魚類㈱	深田サルベージ建設㈱
	旭汽船㈱	㈱水研	㈱福山臨床検査センター
◎就職	旭タンカー㈱	第一中央汽船㈱	プリマハム㈱
官公庁	イオンフードサプライ㈱	大栄フーズ㈱	㈱ハウスイ
水産庁(総合職)	一番食品㈱	㈱ダイキンアプライドシステムズ	㈱北開水工コンサルタント
水産庁(船舶職員)	いであ㈱	㈱大水	㈱前川製作所
気象庁(船舶職員)	今治造船㈱	ダイハツインフィニアース㈱	㈱松岡
防衛省(一般職)	㈱うおいち	太平洋フェリー㈱	マルハニチロ㈱
福島県庁	㈱ STI フードホールディング	大洋エーアンドエフ㈱	マルハニチロシーフーズ㈱
千葉県庁	NS ユナイテッド海運㈱	大和製罐㈱	美須賀海運㈱
東京都庁	NX 海運㈱	㈱タカミヤ	㈱三井 E & S
石川県庁	ENEOS オーシャン㈱	㈱拓洋	三菱鉱石輸送㈱
三重県庁	㈱大島造船所	㈱中冷	㈱武蔵野
鳥取県庁	岡部㈱	㈱長府製作所	名門大洋フェリー㈱
広島県庁	㈱科学飼料研究所	常石造船㈱	㈱物語コーポレーション
山口県庁	カネリョウ海藻㈱	Design City Japan ㈱	ヤマエグループホールディングス㈱
福岡県庁	川崎汽船㈱	㈱デュカム	山崎製パン㈱
大分県庁	㈱紀文食品	㈱東京一番フーズ	ヤンマー船用システム㈱
宮崎県庁	㈱紀文西日本	東洋建設㈱	横浜冷凍㈱
糸島市役所	㈱九州丸和ロジスティクス	東洋製罐㈱	琉球海運㈱
	旭豊海運株式会社	中田建設㈱	㈱良品計画
	㈱極洋	名古屋汽船㈱	
	くら寿司㈱	㈱ニシショウ産業	
	栗林マリタイム㈱	日東製網㈱	

五十音順

令和7年度入試状況

本校の令和7年度入試状況をお知らせします。昨年11月に実施した学校推薦型選抜には、全学科で146名(前年度132名)の応募があり、また、今年2月に実施した一般選抜には全学科で457名(前年度536名)の応募があり、推薦と一般の合計で603名の志願者数となりました。

学科別応募状況は、水産流通経営学科43名(募集人員20名に対する倍率2.2倍)、海洋生産管理学科157名(募集人員45名に対する倍率3.5倍)、海洋機械工学科78名(募集人員45名に対する倍率1.7倍)、食品科学科85名(募集人員45名に対する倍率1.9倍)、生物生産学科240名(募集人員30名に対する倍率8.0倍)でした。全体では603名(募集

人員185名に対する倍率3.3倍)、前年度(令和6年度)入試の志願者数668名(3.6倍)から65名の減少となりました。

令和6年度の西日本を中心とした高校訪問については、対象としたほとんどの高校を直接訪問して本校の紹介などができました。また、昨年度のオープンキャンパスは、8月24日と25日に、参加者数を増やして校内で実施しました。たいへん盛況で本校の魅力を十分に知っていただいたと実感できました。

今年度も引き続き、受験生確保のための活動として高校訪問やオープンキャンパスなどへ積極的に取り組むことで、水産学を学ぶ意欲の高い、多くの高校生に志願して頂けるよう努力して参ります。